



小池多米司

尾関忠雄

山根研一詩論

序にかえて

同人誌「半身」の二人の畏友、小池多米司氏と尾関忠雄氏が私の拙い詩集に対し、それぞれの文学的、哲学的立場から詩論を展開してくれた。

「半身」は昭和四十九年、詩人森杏太郎氏の提唱で出発し、私は昭和五十年から同人に参加している。尾関氏は、小説「逆夢橋／虚無村」や、「夢の王国」等、評論では「アンチ・ロマン論」や「バケツトの沈黙論」等を同人誌に発表。小池氏は小説「病める春」や「朝焼け」等を、又評論では「ニイチエ論の序」や、「バタイユの「内的体験」」、「現代文学の可能性」等をやはり同人誌に執筆している。

尾関氏の詩論は、私の前の詩集「S氏とX嬢」と「無限回廊」の作品を中心にして書かれ、半身十六号で発表されたものを転載、小池氏の詩論は詩集を出版するにあたり、急ぎ書きあげていただいたものだ。又表紙の画像は画家菱沼真彦氏にお願いした。この紙面を借りて皆さまに、心より御礼を申しあげたい。

私は今、俎まないたの上にいる魚そっくりだ。逃げ出したくても、今更どうしようもない。この際、読者各位に存分に自由な感性の庖丁で、ざっくりと詩集を切り拓き、批評し、咀嚼し、時には何かを感じ取っていただければ……と希望するものである。

一九八七年二月二十日

山根研一

目次

翼折れ、傷つきつつも

ペガソス
天馬は原野をめざす……………小池多米司

7

——山根研一「無限回廊」における想像力——

日常性の頽落現象による匿名……………アノニミタイ尾関忠雄

43

——山根研一詩論——

翼折れ、傷つきつつも天馬は原野をめぐす

ペガソス

——山根研一「無限回廊」における想像力——

小池多米司

山根研一の作品は、まず想像力によって読む者を誘ってゆく。彼の作品「無限回廊」の世界は、彼の想像力が捉え、引き出し、切断し、強調し、変形し、停止させて見せた《現代生活》のさまざまな絵——好んで彼はそれを劇の舞台のように語るのだが——を並べた世界である。

春の野原を超えて／湖を散歩していた男が／ふと後ろを振り返ると／背景が消えていた

（湖に窓が浮かぶ）

これは超現実主義シュールレアリスムの手法だ。「背景が消える」という出来事は日常のものではない。この手法では、現実はいくつもの面に分割され、非連続に配列される。これはわれわれの現実が持つ非連続性に対応しているのだ。見せかけのものでしかない仮面パッサナリディの背後に蠢くわれわれ自

身は、まだ生のすばらしいあかしである夢や幻想を失ってはいない。朝目が覚めるや否や、われわれはもう一つの夢を見始める、と誰かが言ったように、われわれの現実を決してそれほど整合性を保っているわけではない。¹

私は、山根が想像力の導きによって、このにせの現実の背後に開く、生と自由の源泉へと通じる地下の階段を降り始めたことはまちがいない、と思う、厳密に言って、彼の手法は、超現実主義的なイメージ作りよりはある意味でもっと切実で、別な途を選んだように見えるかも知れない。というのは、われわれがその前に立たされている現実は、一層複雑で、そして苛酷だからである。人は言う、「シュールレアリスムの手法は、結局のところ、文明が獲得してきたものを投げすて、人間をその本来の姿において、つまりその原始的な自然さのなかに置いて現出せしめ、その結果人間が、自己の心の力をすべて取りもどし、真の意味で自由になりうることのみを目ざしたものであった。²」

山根は彼が現われた詩と言語表現の風土の中で、その手法上のさまざまな影響を受けたに違いないが、一個人の受けたすべての影響を語るには精査を必要とする。しかしいま、私はそのいとまがない。私はここでは「無限回廊」のみに即し、この作品が放射するいくすじ

かの光の分光スペクトルに目を凝らし、あるいは私の感性をばらばらと快く打つ、透明でこまかな霰のような、想像力の結晶についてさぐって見たいと思う。この詩人を襲った《文明》には、かの地で超現実主義シュールレアリスムが誕生した当時よりももっと厳しい事情があることは間違いない。アンドレ・ブルトンとその一派は、当時まだ、燧石を打ち合わせるような、語と語の意外な衝突から迸るイメージに打ち興じていることができた。しかしわれわれの詩人にとっては、そうしているいとまもなかった。現実の展開は余りに急速で、余りにも巨大であつた。つまりやはり、詩は危機にあるのだ。

われわれは想像力についての仮説に耳を藉そう。そして、想像力についての省察の言葉は、それがどれほど哲学的な装いを持ったものであるにせよ、飽くまで仮説にとどまる、ということにしよう。というのは、われわれは絶対というものを排するのであり、たとえそれをめざしているにせよ、それは接近ということであつて、その位置に立とうとは思わないからだ。詩の言葉が渾沌カオスの中に入って来たものであるなら、反省の所産である省察の言語もまた、渾沌カオス

沌^スのただ中に漂うものなのであり、それだけが正しく、それだけが中心に位置するとは思われない。

想像力についての仮説は言う、想像力はわれわれがあとから意識に付け加えた能力ではない、「それは意識が己れの自由を実現する場合の意識の全幅である³」、われわれが人間としてこの世界に姿を現わすためには、われわれは世界の事物の上に貼り付いていたのではない、^{イメージ}像によって世界を無に投ずることによってのみ、無に投じたその反対の側に、われわれは人間として登場するのである、と。このことを認めよう。想像力についてのこの認識が前提にないと、以下の、作品についての一切の批評は根拠のない、あやふやな、場当たりのものとなる。

小さな噴水の傍の／ビルディングの一角に／或る日地面が亀裂をおこすと／
向日葵が出てきた

(向日葵)

ビルディングの一角の、亀裂を起こした地面——都市空間のそのような一隅——が現実
に在り、在りつづけると思つてはならない。それは見過され、無であるのだ。それは詩人が提
示し、呼び醒ましたからこそ、そこに在るのだ。像は、現実の中からそれらのものを呼び出
し、そして否定する。この時われわれは、そこに詩人が語りつつ登場することを認める。彼
の登場は待ち望まれたものである。否、是非とも彼は登場してもらわぬと困るのだ。とい
うのは、彼は《人間》と名のつく存在を代表しているからだ。不幸にしてこの地上に核爆発が
あり、建物^{ビル}が幻影のように、悪夢のように、たちこめた霧^{ガス}のように消え失せようとも、そこ
に大地が残り、空が残り、太陽が残ったら、息たえだえであつても、詩人は言葉を語らねば
ならないのだ。

山根の作品は少くとも《現代生活》の諸相、即ちその意味、その様相がさまざまに重なり
合う文明、技術、管理社会——いかにも不愉快な言葉ではある——を描いている。描かざる
を得なかつたのだ、彼は被害者である。

比較は唐突で、大變無理があるとしても、かつてバイロンが、「古錆びた壁を洗って流れゆく河よ、私の愛する人がそこに住み……」⁴と歌い、リルケが、「愛はどんな風にして君に來たか？ それは照る日のように、花ふぶきのように来たか？」⁵などと書いたことと比べる、われわれがいま向き合っている作品はいかにも荒廢した風土——どこに一体、心というものがあるだろう？——と、不幸の感は免かれない。いや、もっと言つて不吉な予感さえする。私はゲーテの詩を読む時、しばしば胸の熱くなるのを覚える。人間がいかに美しく、そして幸福であつたかを、そこではいささかでも偲ぶことができるからだ。人間を語る古典の存在することは、私には言葉では言い尽くせない大きな驚きである。

若しあなたが機会があつて、高速道路^{ハイウェイ}の傍を通り、その下に少しばかりのあき地を見つけたら、そこに暫く身を潜めて、往き交う車の音に耳を傾けて欲しい。え？　なんだって？　そんな速度でどこへ行くのか？　何を運んでいるのか？　人々は狂っているのではないか？　こう思つたら、あなたは詩を解する人である、と私は思う。一体、今日、詩は可能だろうか？　可能だとすれば、詩人とは挙げて己れの感性を傷だらけにする人間のことではないか？　傷だらけになりながら、なお言葉を失わぬ人間のことではないか？

文明の問題、詩人の感性のすべてを蔽っている文明の問題を考えねばならない。シャワー、タオル、マニキュア、テープ、マンション……と、山根が事もなげに作品に持ち込むどの言葉も、文明の所産でないものはない。われわれは目が覚めるや、文明のただ中に居るのだ。山根が描くところは文明の生活である。

このことをわれわれは何か当然のことと受け取ってはならない。精神にとって、当然とみなしうる事象というものは、何一つと存在しない。そこ、街路に車が走っている——それは、決して当然なことではないのだ。自分の内に深く、棘のように刺さっている《車》というものの意味を抜かないで、われわれは自由になれるだろうか。文明はわれわれにとって重苦しい、最早選択のきかない問題、即ち運命といえるものである。

文明に対してわれわれが取るべき態度は、差し当たって二つある。一つは、やはりそれを歴史の問題としてとらえることである。何故いま私は、ここにいるのか、と問うことである。同様に、何故詩人は次のように書くことができたのか、と問うことである。

冷房装置が止まり／オフィス街の人たちは／うろろと黒い虫になって／破れたガラスを出たり入ったりした……

（向日葵）

詩人は文明の終末を歌っているのではないか、と言われるかも知れない。まあ、待っていただきたい。そうかも知れない、いや、多分そうだろう。必然的に詩人の目は、文明の葬送の方を見遣るからだ。というのは、詩人というのは、ひたすら人間を書くことを業としているのであり、歴史の問題とは、歴史を遡行して、自己同一性アイデンティティの源流へと探検することなのだ。今日、詩人に限らず、書くことを試みる者は、多少とも書くことの根源を問い直すという困難な作業を避けて通ることはできない。書くことをめぐっての商人と乞食がいるが、これは別である。書く者は、書くことの原点——目下のところは想定されるに過ぎないものだが——に對して、どのあたりにか、己れの位置を定めなければならぬ。

詩は言葉で作るものだ⁶、とマラルメが言ったからには、靈感は信ずるに足りない。今日言